鬼ノ岩屋（おにのいわや）1号墳の調査

写真５　鬼ノ岩屋古墳群全景

所在地：別府市大字北石垣字塚原

調査の情報
調査機関：別府市教育委員会
調査期間：平成 21 年（2009）5 月 26 日から 6 月 27 日
　　平成 22 年（2010）7 月 21 日から 10 月 22 日
調査担当者：大嶋健司（別府市教育庁生涯学習課　調査当時）
　　岸田優子（別府市教育庁生涯学習課　調査当時）
　　下森弘之（別府市教育庁生涯学習課　調査当時）
報告書情報：2016『市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７』
　　別府市教育委員会
報告書担当者：秦　広之（別府市教育庁生涯学習課）

第３章第２節１で報告する鬼ノ岩屋１号墳の発掘調査の結果は、平成 21 年（2009）度及び平成 22 年（2010）度に行われた別府市教育委員会による調査成果（2016『市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７』）を掲載するものである。掲載にあたり本書の体裁にあわせるため若干の修正を加えている。

第２節　鬼ノ岩屋古墳群の調査

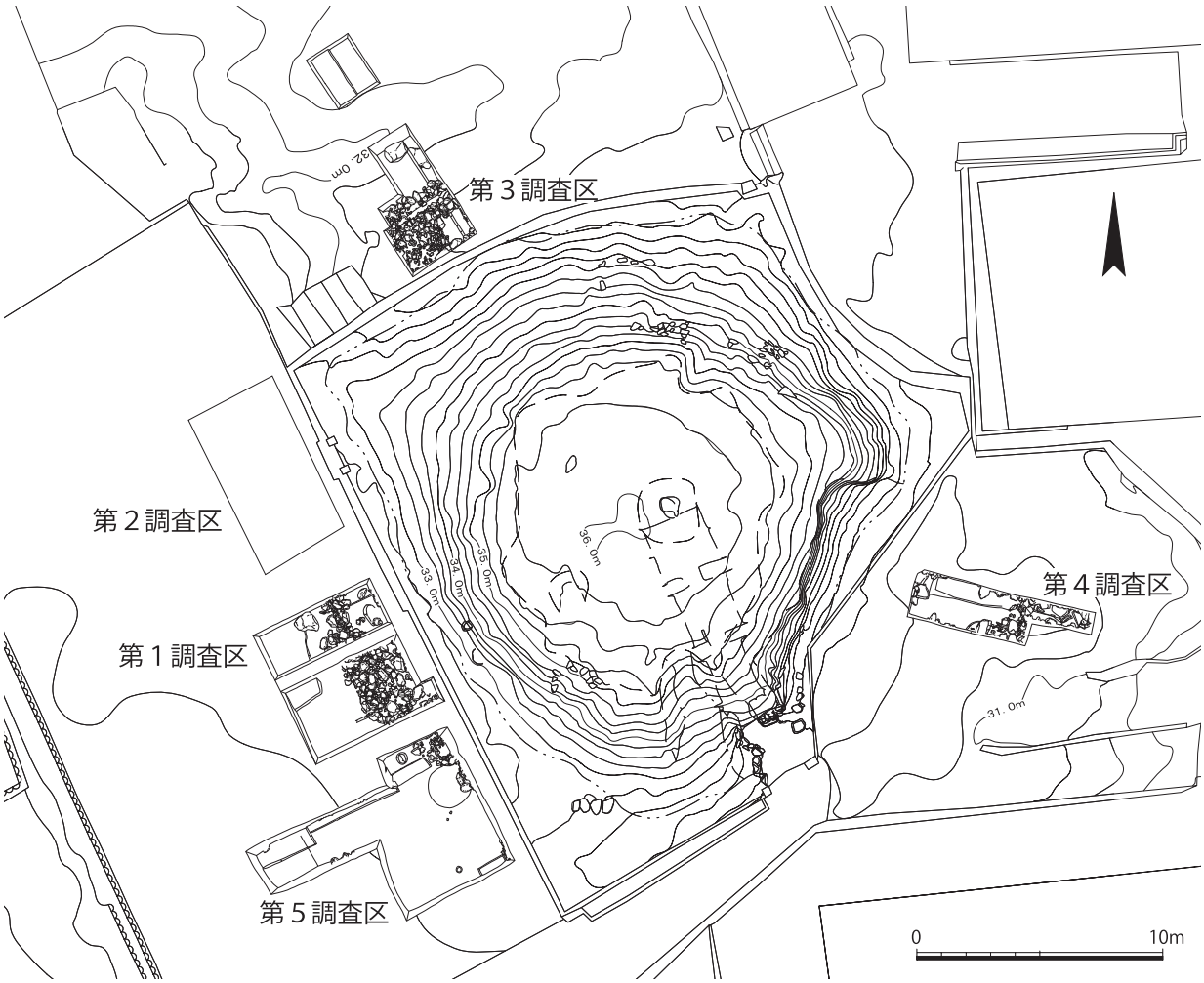
１　鬼ノ岩屋１号墳の調査

調査の概要（第 57 図）

鬼ノ岩屋 1 号墳の範囲確認調査は、平成 21 年（2009）度・22 年（2010）度の 2 カ年にかけて行った。平成 21 年度は古墳の西側と北側に 3 箇所の調査区を設定し、平成 22 年度は古墳の南西側と南東側に 2 箇所の調査区を設定して調査を実施した。合計 5 箇所の調査区で、調査面積は 136.6㎡。

別府市教育委員会による範囲確認調査と並行して、平成 21 年度に別府大学文化財研究所により墳丘測量調査が行われている。また、平成 21 年度から 3 カ年にわたり石室内部の測量調査も実施した。

古墳が所在する地域は、鶴見連山に起源を持つ大小の角閃石安山岩が土層中に堆積しており、古墳に伴う遺構との判別に苦慮したが、土層の検討から暗灰褐色粘質土の地山を確認し、その上層にある淡黒色土が古墳時代の表土という認識にたち、これを手掛かりに調査を行った。



第 57 図　鬼ノ岩屋１号墳調査区位置図（1/300）

古墳に伴う遺構が確認されたのは、古墳西側に設定した第１・５調査区及び古墳北側の第３調査区であり、このうち第１調査区及び第３調査区で比較的良好な古墳の端部と考えられる礫群を検出した。第２調査区は全面的に後世の撹乱を受けており古墳の遺構を確認することは出来なかった。第４調査区は大部分が後世の撹乱を受けていたものの中央部付近で古墳の遺構の可能性がある礫群を確認した。

第１調査区（第 58 図）

古墳の西側に 5.5m × 6 m のほぼ正方形の調査区を設定した。調査区西側は撹乱による削平が激しく、土層の堆積状況が確認できたのは南側壁面のみであった。10 層（茶褐色土）及び 11 層（黒色土）は墳丘の盛土と考えられる。12 層の暗灰褐色粘質土は地山と考えられ、墳丘端部と考えられる列石は、この層の上に設置されていた。墳丘端部の地山の標高は 31.6m であり、周溝は確認することは出来なかった。遺物は須恵器片が少量出土した。

1 表土
2 灰色土（表土）
3 暗茶褐色土（撹乱）
4 暗茶褐色土（拳大の礫多数含む）
5 暗茶褐色土（粘質土、固くしまる、現代の遺物を含む）
6 暗黄褐色土（砂質、しまりなし）
7 明白黄褐色土（砂質、ややしまる）
8 灰褐色粘質土（鉄分の沈着）
9 淡黒色土（粘質土、かたくしまる、旧表土か）
10 茶褐色土（若干粘質がある、かたくしまる）※墳丘盛土
11 黒色土（粘性がある、しまりあまりない、拳大程度の礫を多く含む）※墳丘盛土
12 暗灰褐色粘質土（鉄分の沈着が若干みられる、小礫を少々含む）※地山
13 灰褐色土（粘性若干あり、小礫～人頭大程度の礫多数含む）※地山

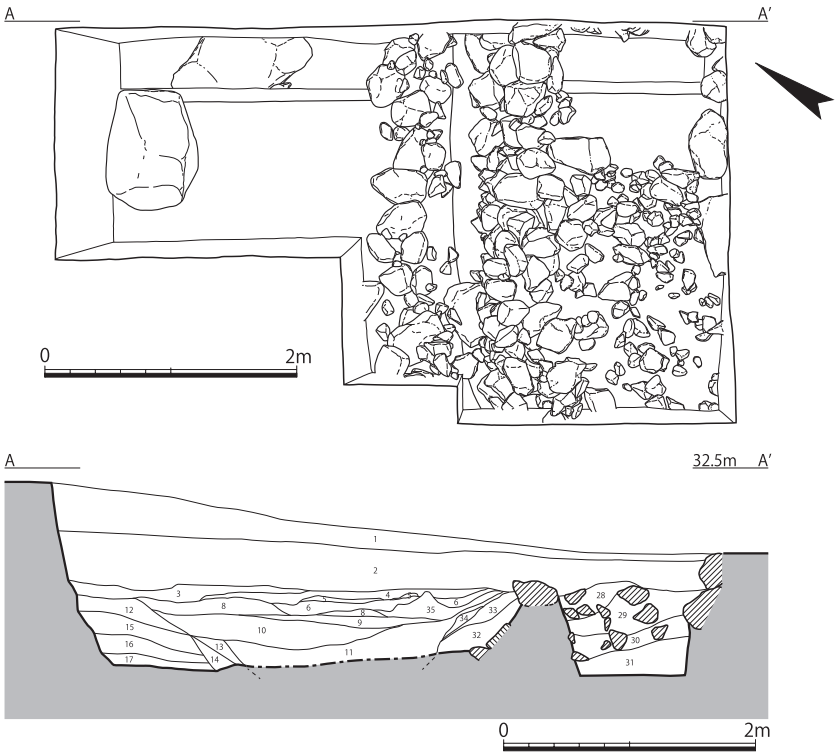
第 58 図　第１調査区平面図・土層断面図（1/60）

第２調査区（第 57 図）

古墳の北西側に４m × ７m の調査区を設定した。第１調査区の北隣に位置する調査区であり墳形を確認するために設定したものであるが、上面は全面にわたり撹乱を受けており今回の調査では古墳の遺構を確認することは出来なかった。

第３調査区（第 59 図）

墳丘北側に２m × 5.5m の調査区を設定し、遺構の検出状況を確認したうえで調査区の西側及び北側を拡張して調査を行った。後世の水路による撹乱も認められるが、調査区の中央部から墳丘端部と考えられる列石を確認した。列石は暗灰褐色粘質土の地山の上に設置されており、列石を覆う黒色土など第１調査区と同様な状況が伺えた。周溝の有無を確認するため第３調査区の北側から２m 離した地点に 2m × 2.5m の拡張調査区を設定した。ほぼ同じ標高で地山（暗灰褐色粘質土）を検出し、地形上の変異が確認出来ないことから墳丘の北側においては、周溝が存在しない可能性が高いものと考えられる。礫群を覆う黒色土層より須恵器が出土した。



1 表土（真砂土）
2 表土　明茶褐色層（現代遺物を多く含む）
3 明茶褐色層（若干の粘性あり、褐色砂質ブロックを多く含む）
4 茶褐色層（若干の粘性あり、しまりなし）
5 褐色砂質土（しまりなし）
6 灰色土（若干の粘性あり、しまりなし、褐色ブロックを多く含む）
8 明黄褐色 砂質土（しまりなし）
9 灰色土（若干の粘性あり、ややしまる）
10 明黄褐色土（砂質土、ややしまる）
11 暗褐色土（砂質土、ややしまる）
12 明黄褐色土（粘性が強い、拳大～人頭大の礫を多く含む）
13 灰褐色土（砂質、小礫を多く含む、しまりなし）
14 灰褐色土（砂質、小礫を多く含む）
15 灰色粘質土（しまりなし）
16 黒色土（粘質土、ややしまる）
17 灰色土（粘質土、ややしまる）
28 黒色土（粘性があり、しまりなし、拳大程度の礫を含む）
29 暗茶褐色土（粘性があり、しまりも若干ある）
30 暗茶褐色土（粘性がつよく、かたくしまる）
31 暗茶褐色土（粘性がつよく、かたくしまる）
32 淡黒色土（粘性が若干あり、しまりなし）
33 暗灰褐色粘質土（粘性があり、褐色ブロックを多く含む）
34 黄褐色砂質土（しまりなし）

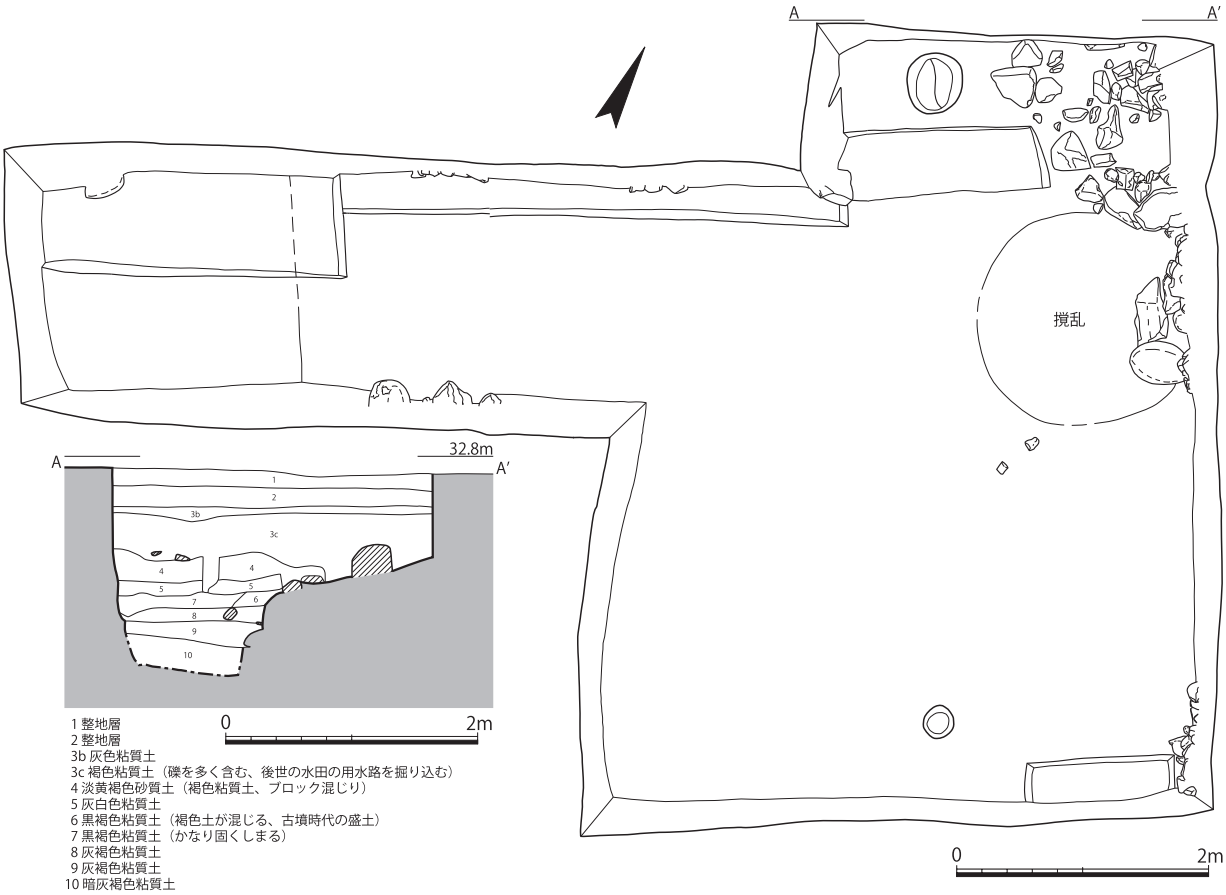
第 59 図　第３調査区平面図・土層断面図（1/60）

第４調査区（第 57 図）

墳丘南東側に２m × 7.5m の調査区を設定した。墳丘側及び東側が後世の撹乱を受けていた。調査区の中央部（調査区西端から約４m ～５m）で、第１調査区及び第５調査区と同様の黒褐色土を確認し、礫群も検出した。遺物は少量の須恵器片が後世の撹乱を受けた部分より出土した。

第 5 調査区（第 60 図）

平成 21 年度に調査を行った第 1 調査区の南側に 6.4m × 9.7m の調査区を設定した。調査区の北東隅で、第 1 調査区で検出した墳丘端部と考えられる列石の続きを確認した。しかし調査区北東隅で検出された列石の延長は、調査区東壁付近で後世の撹乱を受けており南側へと延びる墳丘端部の確認までには至らなかった。周溝については、西側に長くトレンチ状の調査区を設定したものの地山まで撹乱を受けた状態であり、確認することは出来なかった。



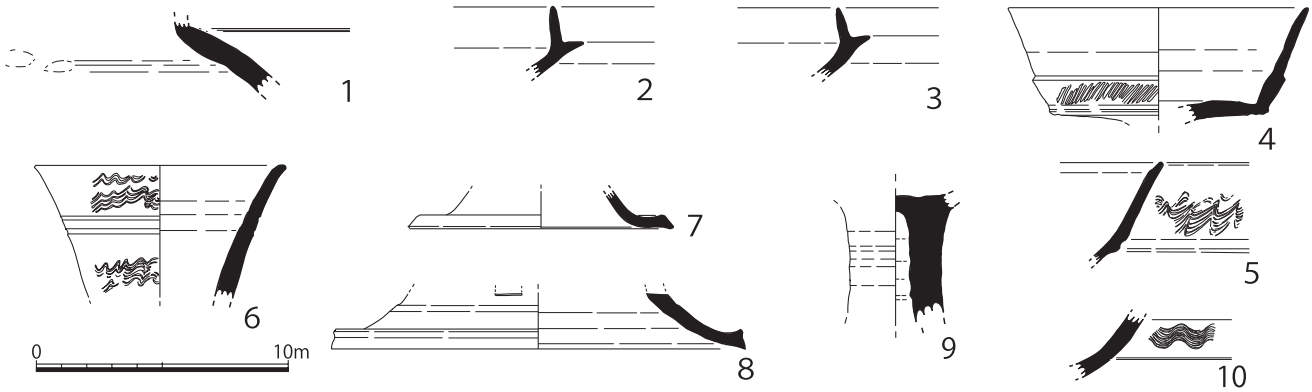
第 60 図　第 5 調査区平面図・土層断面図（1/60）

出土遺物（第 61 図）

1 は第 1 調査区から出土した須恵器。短頸壺か。外面はナデ、内面は回転ナデが施される。

2 ～ 9 は第 3 調査区から出土した須恵器。2 ・ 3 は坏の口縁部片で、立ち上がりは直線的に内傾し、口縁端部に段をもたない。4 は高坏で、復元口径 12.0㎝を測る。直線的に立ち上がる口縁部の下部を肥厚させ斜行線文を施す。口縁部と坏部底面の坏部底面側の境付近に沈線を 1 条施文する。外面・内面ともに回転ナデが観察される。5 は瓹で、頸部と口縁部の境界に段を設け、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁端部には緩やかな段を設ける。口縁部には櫛描波状文を施す。色調は外･内面ともに白色を呈する。6 は瓹の口縁部であると考えられ、復元口径 10.0㎝を測る。口縁部は外反気味に立ち上がる。頸部に 2 条の沈線を施し、下部にも沈線が 1 条確認される。口縁部から頸部にかけて櫛描波状文を施文する。5 と同様に色調は白色を呈する。7 ・ 8 は高坏の

脚。７の復元底径は 10.5㎝で、外面・内面ともに回転ナデ。８の復元底径は 16.4㎝で２条が１セットとなった沈線を施文する。脚部は内湾し端部を鋭く仕上げる。透かしの端部が観察される。９は高坏の坏部と脚部の接合部。脚部は３方向の透かしを持つものになると想定される。10 は第４調査区で出土した須恵器。



第 61 図　出土遺物（1/3）

小結

遺物について

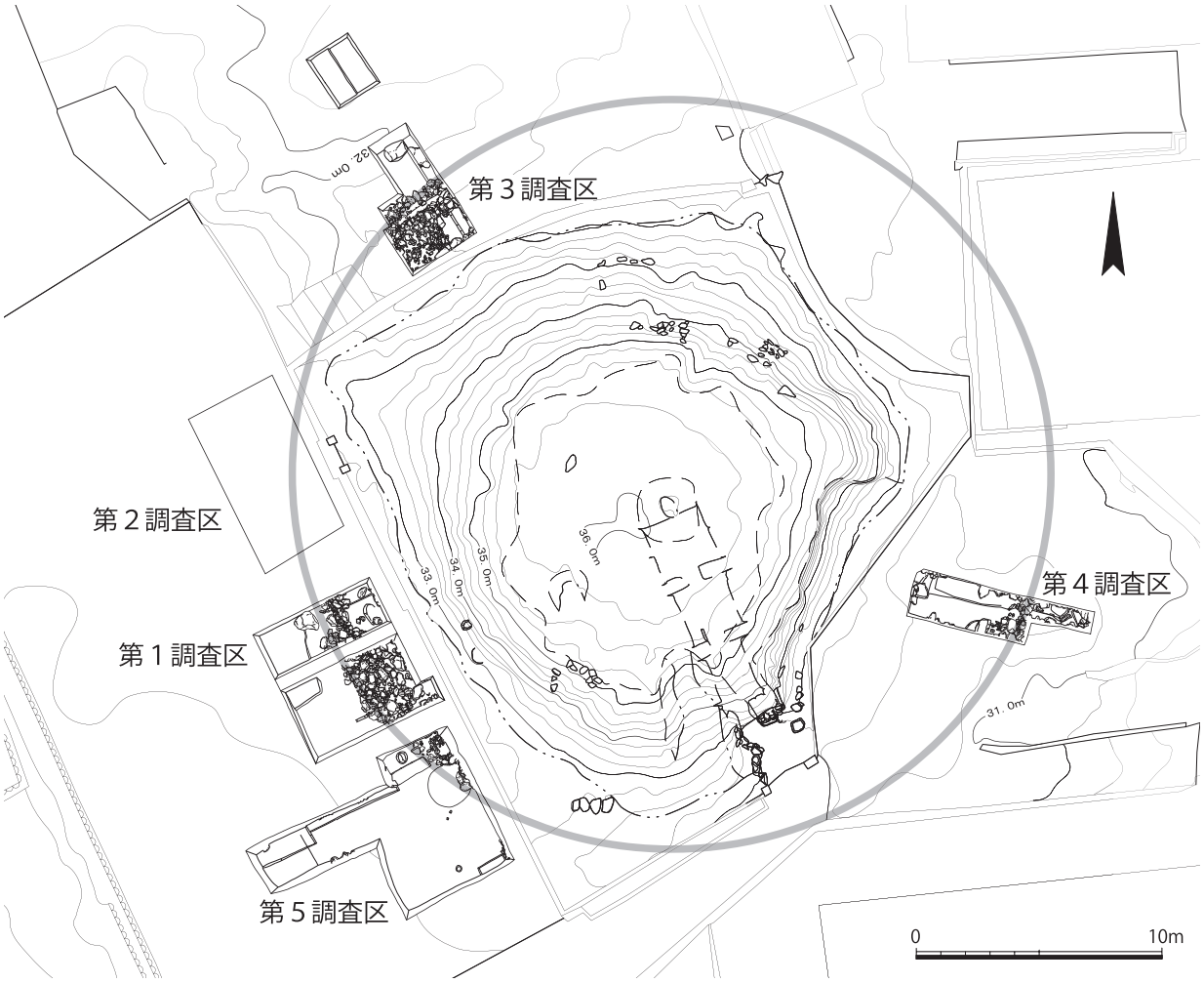
図示可能な遺物は第１・３・４調査区より出土した。いづれの調査区も後世の撹乱を受けている部分があるため良好な出土状況ではないが、第３調査区で古墳の礫群を覆う黒色土より須恵器が出土している。概ね TK209 型式期に相当するものと考えられる。

墳丘について

第１・３・４・５調査区において古墳に伴う遺構を確認した。これら遺構が確認された調査区では、暗灰褐色粘質土の土層が確認でき地山と考えられる。古墳の墳丘端部にあたる列石はこの暗灰褐色粘質土の上に設置している傾向を確認することが出来た。周溝に関しては、第３調査区及び第５調査区において拡張部を設けて検出を試みたが、明瞭な地形変化を確認することは出来ず、現時点においては、周溝は伴わなかった可能性が高いものと考えられる。

墳形に関しては、第５調査区より古墳南西部の隅を確認しており円墳となる可能性が高いものと考えられる。墳丘規模に関しては、第１・３・４・５調査区で確認された墳丘端部を基に検討すると直径約 31.0m と復元される。

発掘調査の結果、これまで直径約 24m の円墳と考えられてきた鬼ノ岩屋１号墳の墳形及び墳丘規模は、直径約 31m の円墳であることが判明した。また、TK209 型式期の須恵器が出土し、古墳の築造時期の参考となる資料を得ることが出来た。



第 62 図　鬼ノ岩屋 1 号墳復元図（1/300）

第１調査区（西から）

第１調査区南壁土層

第２調査区（西から）

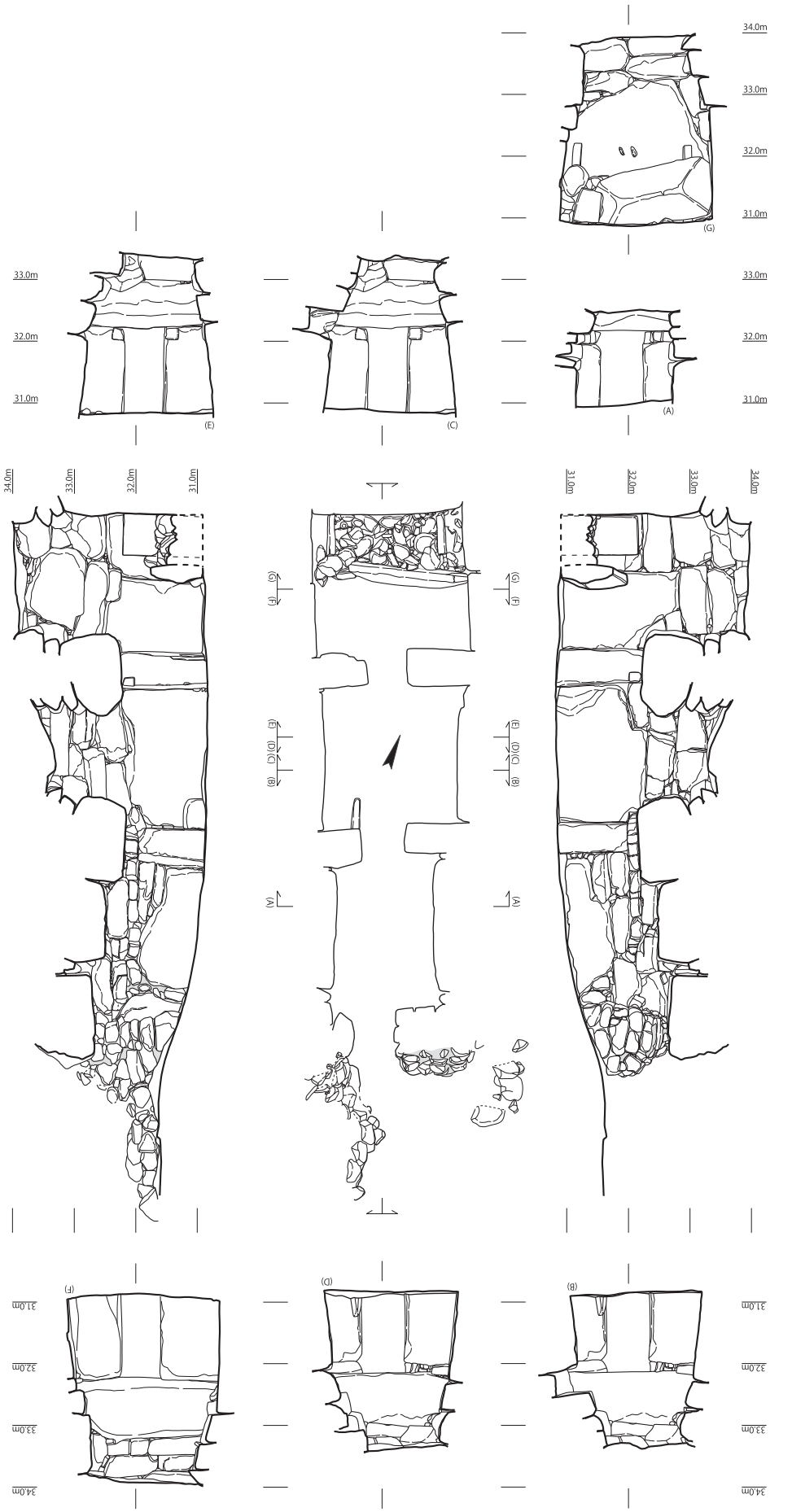
第３調査区（北から）

第３調査区東壁土層

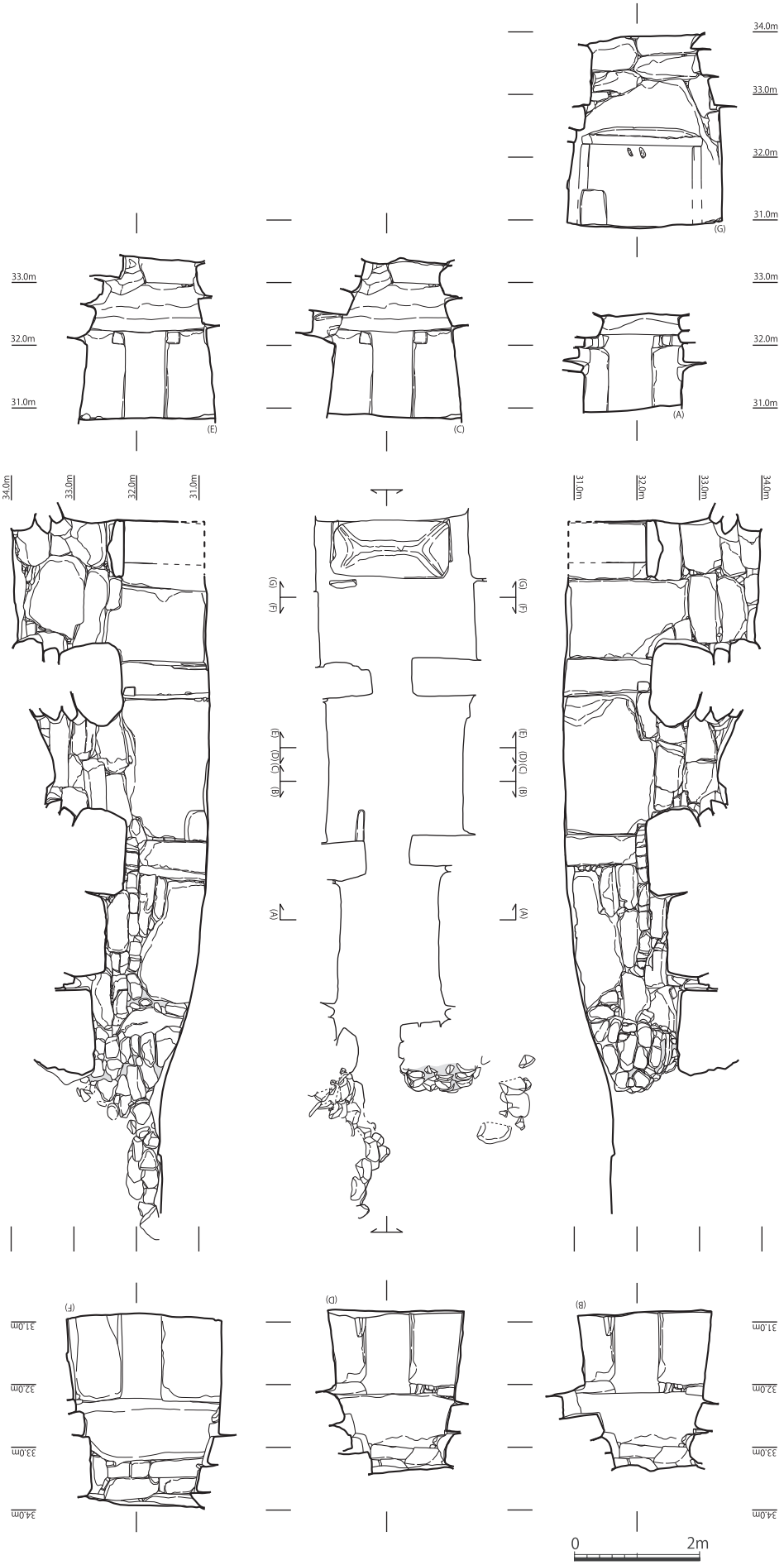
第３調査区（北から）

第４調査区（西から）

第５調査区（南から）



第 63 図　鬼ノ岩屋 1 号墳石室実測図【現況図】(1/100)



第 64 図　鬼ノ岩屋 1 号墳石室実測図【石屋形復元】（1/100）

鬼ノ岩屋２号墳の調査

写真６　鬼ノ岩屋２号墳

所在地：別府市大字北石垣字塚原

調査の情報
調査機関：別府市教育委員会
調査期間：平成 20 年（2008）5 月 26 日から 6 月 27 日
11 月 25 日から 12 月 26 日
調査担当者：下森弘之（別府市教育庁生涯学習課　調査当時）
報告書情報：2009『市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 』
別府市教育委員会
報告書担当者：下森弘之（別府市教育庁生涯学習課　報告当時）

第３章第２節２で報告する鬼ノ岩屋２号墳の発掘調査の結果は、平成 20 年度に行われた別府市教育委員会による調査成果（2009『市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 』）を掲載するものである。掲載にあたり本書の体裁にあわせるため若干の修正を加えている。

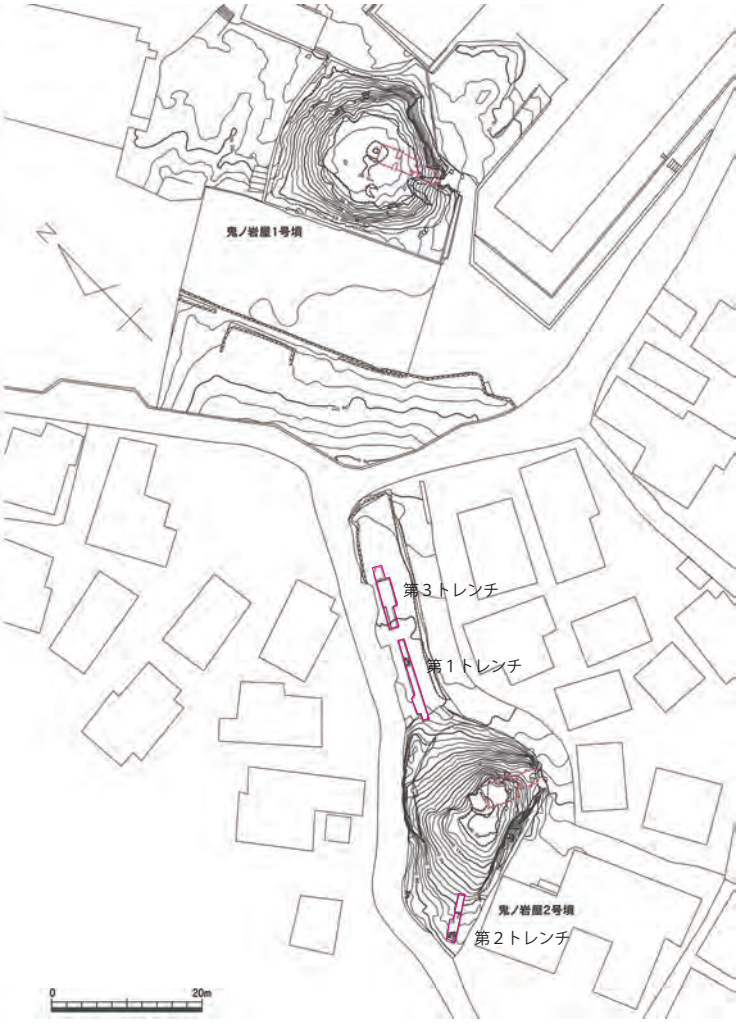
2　鬼ノ岩屋２号墳の調査

調査の概要

平成 20 年度前期の調査では、墳丘端部及び周溝等の遺構検出に努めるため、史跡範囲内に２ヶ所の調査区を設定し、墳丘範囲の確認調査を実施した。両調査区ともに墳端と考えられる根石を検出し、墳丘規模の確定に至った。調査期間は、５月 26 日から６月 27 日までの約１ヶ月間実施した。調査成果をもとに８月 23 日に現地説明会を行い、同時に１号墳及び２号墳の石室の開放、１号墳西側より出土した須恵器類などを一般公開した。雨天にもかかわらず説明会には、約 40 名の方々が訪れた。

調査終了後、真砂土及び土嚢により遺構の保存措置をした後、人力により埋め戻し、９月 10 日に調査の前期日程を終了した。

前期の調査成果を受け、第１トレンチで検出した墳端部分の位置から、周溝の確認が必要であるとの見解に至り、第１トレンチ北側での追加調査を実施した。調査期間は 11 月 25 日から 12 月 26 日までの間に約３週間実施した。調査終了後、前期調査と同様に真砂土により遺構の保存措置をした後、人力により埋め戻し、12 月 26 日に平成 20 年度調査の全日程を終了した。



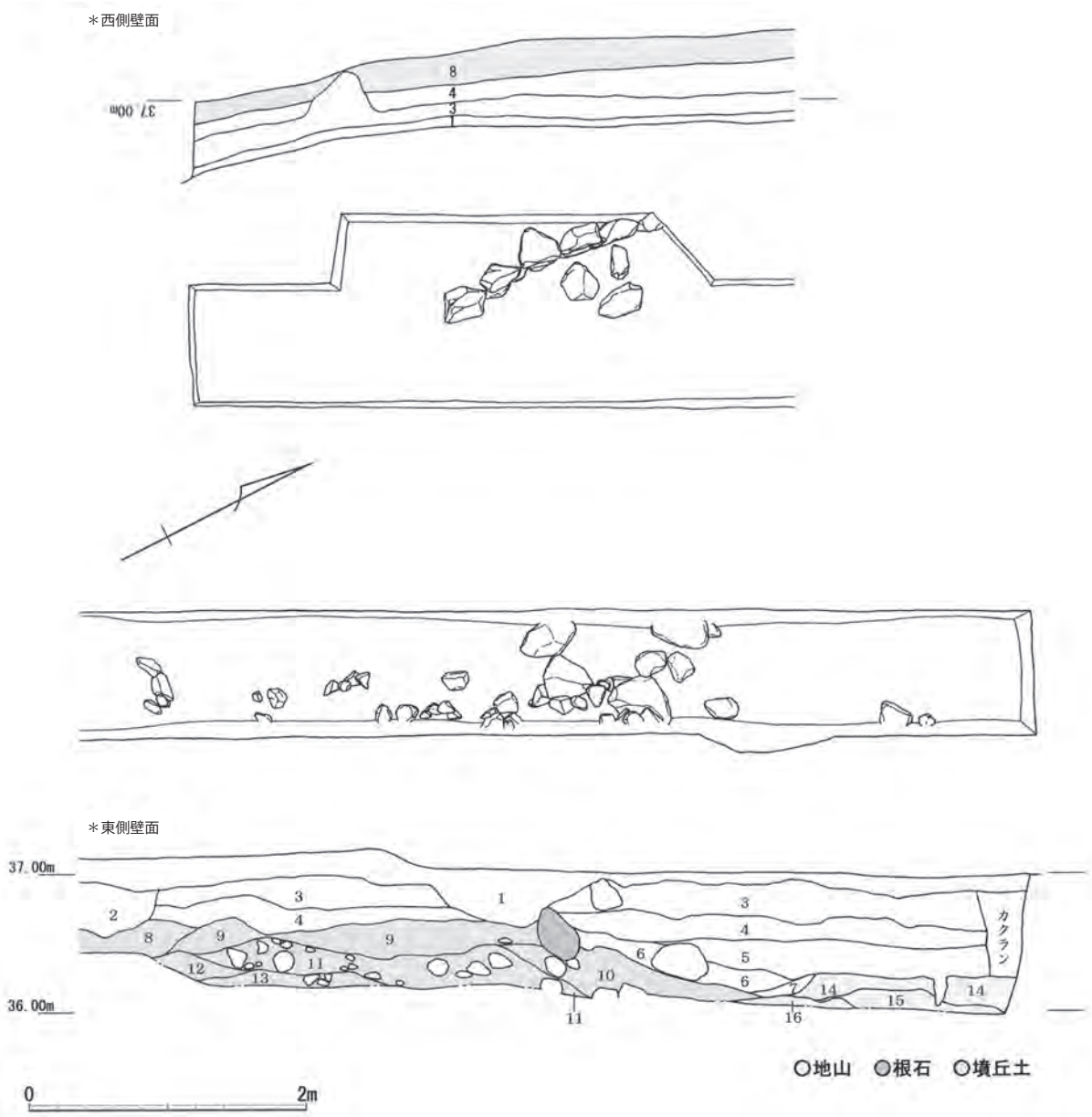
第 65 図　鬼ノ岩屋古墳位置図（1/1000）

第１トレンチ

第１トレンチは、墳丘端部及び周溝確認のため墳丘北東側に 11.5 m× 1 mの調査区を設定し遺構の検出に努めた。

調査の結果、調査区南側から近現代に比定される石垣を検出し、北側から墳丘端部と考えられる根石を検出した。

近現代の石垣（標高約 36.60 m）は墳丘北側を一部削平し、平坦面を作出することにより造られている。撹乱により古墳に伴う葺石は検出できなかったが、人頭大程度の根石（標高約 36.50 m）



1 茶褐色(表土。) 2 明茶褐色(粘性あり。しまりなし。) 3 暗茶褐色(粘性あり。しまりなくパサパサ。近現代のゴミ含む。)
4 茶褐色(粘性あり。ややしまる。) 5 茶褐色(粘性あり。かたくしまる。4より暗い。) 6 黒色(粘性・若干のしまりがあり。)
7 黒色(若干の粘性あり。14層ブロックを含む。) 8 淡茶褐色(粘性があり、かたくしまる。) 9 暗灰褐色(粘性があり、かたくしまる。褐色ブロック若干含む。) 10 暗茶褐色(粘性あり。かたくしまる。拳大礫若干含む。) 11 茶褐色(粘性があり、かたくしまる。拳大礫多く含む。) 12 茶褐色(粘性あり。かたくしまる。褐色ブロック含む。) 13 淡明茶褐色(砂質。かたくしまる。礫含む。)
14 明茶褐色(砂質。ややしまる。) 15 淡黒色(砂質。ややしまる。小砂利を含む。) 16 明茶褐色(砂質。かたくしまる。礫含む。)

第 66 図　第１トレンチ平面図・土層断面図（1/50）

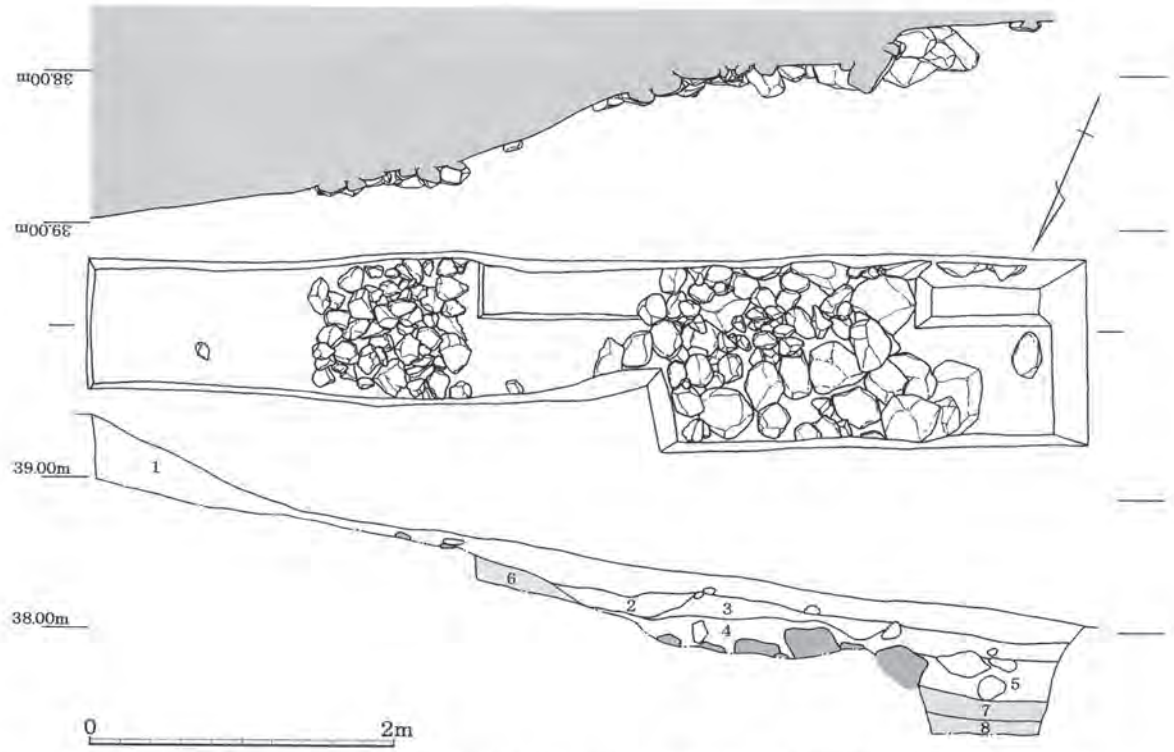
は下部を第 10 層に包含されている状態で検出した。当初、調査範囲からは明瞭な周溝の検出はできなかったが、第 3 トレンチの調査成果から、第 14 層でみられる浅い土層の立ち上がりが周溝になる可能性が考えられる。

土層堆積状況から、畑地作出のため墳丘盛土部分を削平し平坦面を築いていることが窺える。このことにより、石垣底面のレベルで墳丘北側が整えられたことにより、葺石は全て取り除かれ、若干レベルの下がる根石は頭が出た状態で残存したものと考えられる。

第 2 トレンチ

第 2 トレンチは、墳丘端部確認のため墳丘南西側に 6.5 m × 1 mの調査区を設定し検出に努めた。調査の結果、1 段目及び 2 段目の平坦面を検出した。1 段目平坦面（標高約 38.00 m）は、根石及び葺石を検出し、これにより墳丘端部を確認した。根石は、若干現位置を留めていない可能性のある礫もあるが、人頭大程度の自然石を使用し、第 1 トレンチ同様に第 7 層に下部を包含される。葺石は拳大から人頭大に近い大きさのものまで幅をもち、平坦面は葺石サイズの違いからかなりの凹凸面を呈する。2 段目平坦面（標高約 38.70 m）からは葺石を検出した。葺石は、拳大の自然石を敷き詰める。1 段目平坦面から 2 段目平坦面に至る傾斜面では、傾斜面最下段の 1 列で他の葺石より一回り大きな扁平の自然石を約 25 度の角度で設置している。2 段目平坦面から上の傾斜面では、残存している葺石は検出できなかった。

根石西側に設定したサブトレンチでの土層堆積状況から、旧地表土の上に盛土（整地土層）をおこない、根石を設置していることが窺える。



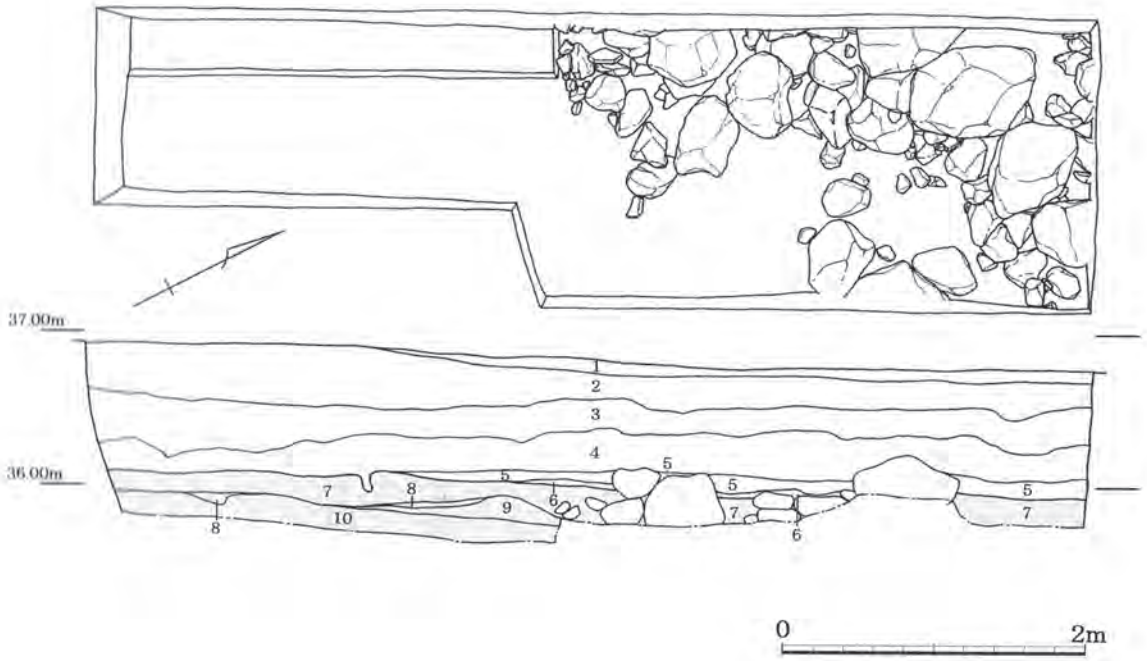
1 暗茶褐色(表土)　2 黒褐色(現代カクラン)　3 暗褐色(しまりなくパサパサ)　4 暗茶褐色(しまりなくパサパサ)
5 暗茶褐色(若干のしまりと粘性あり)　6 茶褐色(粘性・しまりがあり、小砂利を少々含む・墳丘盛土)
7 明茶褐色(しまり粘性ともにあり)　8 淡黒色(しまりがあり、小砂利を含む)

第 67 図　第 2 トレンチ平面図・土層断面図（1/50）

第３トレンチ

第３トレンチは、第１トレンチで検出した根石部分から北側において、周溝及び地山確認のため墳丘（第１トレンチ）北東側に 11 m× 1 mの調査区を設定し遺構の検出に努めた。

調査の結果、トレンチ北側で多くの礫を検出した。傾斜方向に沿う礫の検出状況や砂層の土層堆積状況などから、土石流により低地に溜まった状況が窺える。遺物は、実測には堪えないが第５層から須恵器胴部片が１点出土した。



1 明黄褐色(表土)　2 暗灰色(表土)　3 茶褐色(粘性あり。近現代のゴミ含む。)　4 明茶褐色(粘性あり。)
5 淡黒色(粘性あり。ややしまる。6・7層ブロック含む。)　6 黄褐色(砂質。しまりなし。小砂利ブロック含む。7層ブロック含む。)
7 淡茶褐色(砂質。ややしまる。)　8 明灰白色(粘質土。かたくしまる。黄褐色ブロック含む。)
9 灰白色(砂質。かたくしまる。小砂利を含む。)　10 淡黒色(砂質。かたくしまる。小砂利を含む。)

第 68 図　第３トレンチ平面図・土層断面図（1/50）

小結

墳丘について

これまで鬼ノ岩屋２号墳は、墳丘規模約 30m の円墳とされてきた。今回２ヶ所のトレンチから墳端と考えられる根石等を検出し、その成果を基に墳丘を復元すると、37.5m の墳丘規模が考えられる。墳丘の復元ラインについては、第１・２トレンチの根石を結び円を描くと、中心点が石室奥壁上に位置する。墳丘の高さについては、現状約４m の高さが確認できるが、第２トレンチの傾斜角や、石室の状況などから築造当時は現在より１～２m 程度高かった可能性が考えられる。第２トレンチ１段目及び２段目の平坦面のレベルや緩やかな傾斜角から、墳丘は３段築成と考えられる。しかし、第１・２トレンチで検出した根石のレベル差（第１トレンチ 36.5m・第２トレンチ 37.8m）から、西方から東方に向けて傾斜する地形にあわせ１段の段差をつけて築造していたものと考えられる。

周溝について

第１トレンチで検出した根石より北側約２ｍの地点で砂質土層（14 層）の立ち上がりを確認した。当初、14 層は地山にしては締りがなく、下方から黒色を呈する土層を検出したことなどから、地山としては認識していなかった。しかし、第３トレンチの調査成果から当該砂質土層が古墳築造当時の地山である可能性が高いと考えられ、14 層の立ち上がりを周溝と認識した。一方、第２トレンチでは、根石東側の土層（７層）はほぼ水平堆積をなし、第１トレンチとの差異を感じる結果となった。今回一ヶ所での不明瞭な検出なので、今後の周辺調査による資料の増加が必要と考えられる。

第 69 図　鬼ノ岩屋 2 号墳墳丘復元図想定図（1/300）

第１トレンチ全景（北から）

第１トレンチ土層堆積状況（東から）

第１トレンチ土層堆積状況（東から）

第１トレンチ土層堆積状況（東から）

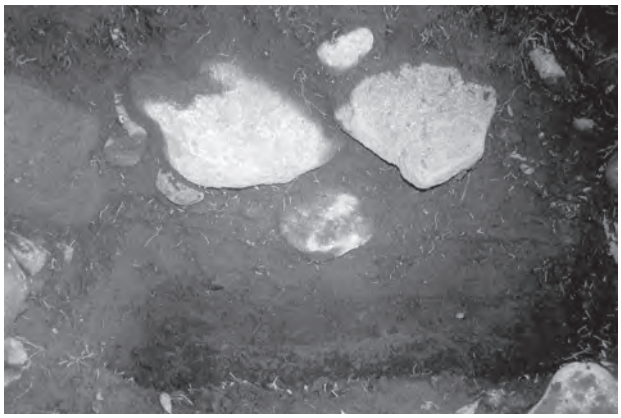
第１トレンチ遺構検出状況（北から）

第１トレンチ南側石積検出状況（東から）

第２トレンチ全景（西から）

第２トレンチ１段目平坦面葺石検出状況（西から）

第２トレンチ２段目平坦面葺石検出状況（西から）

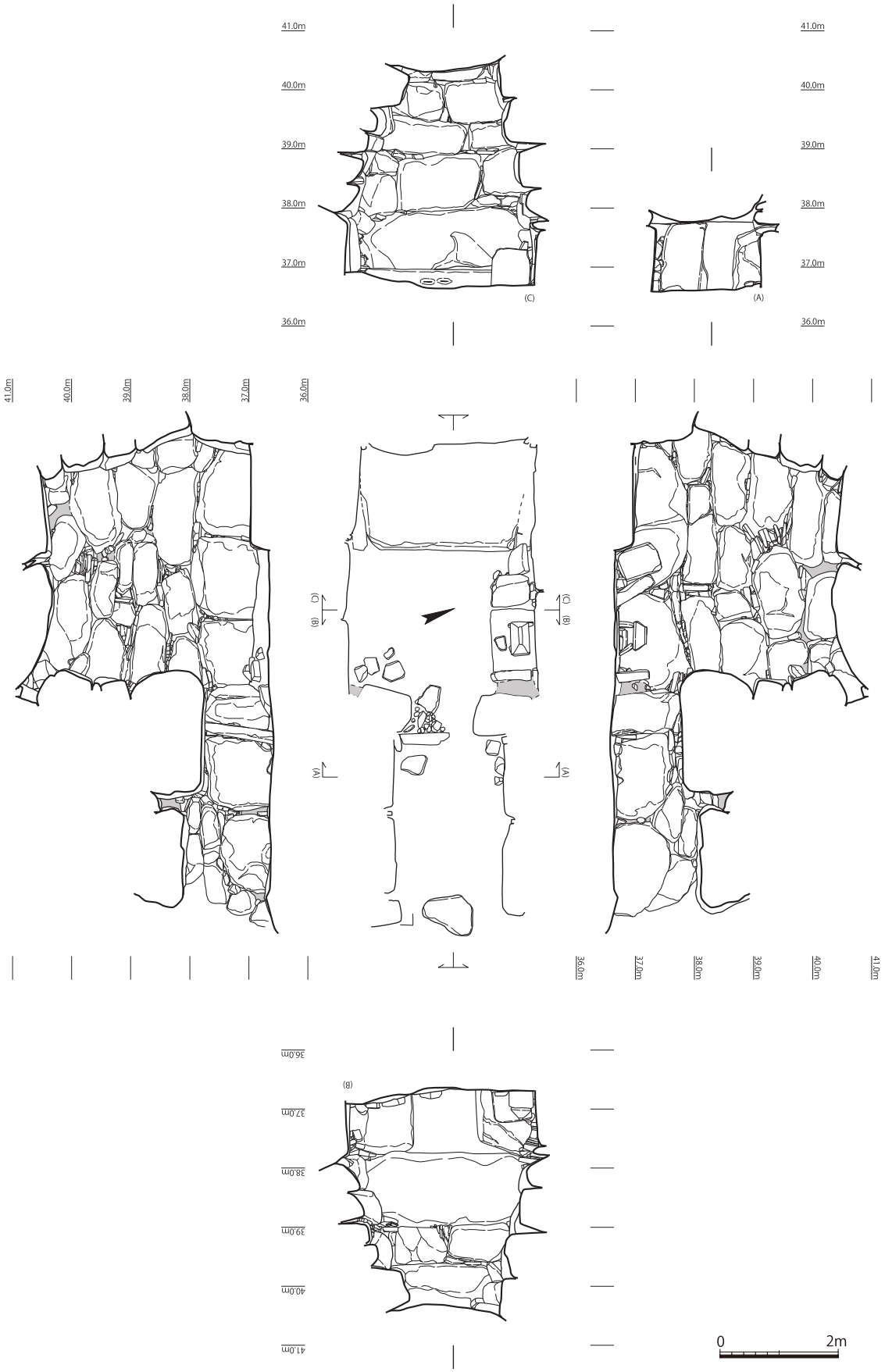

第２トレンチ土層堆積状況（北から）

第３トレンチ全景（南から）

第３トレンチ土層堆積状況（東から）

第３トレンチ土層堆積状況（東から）

第３トレンチ礫検出状況（東から）

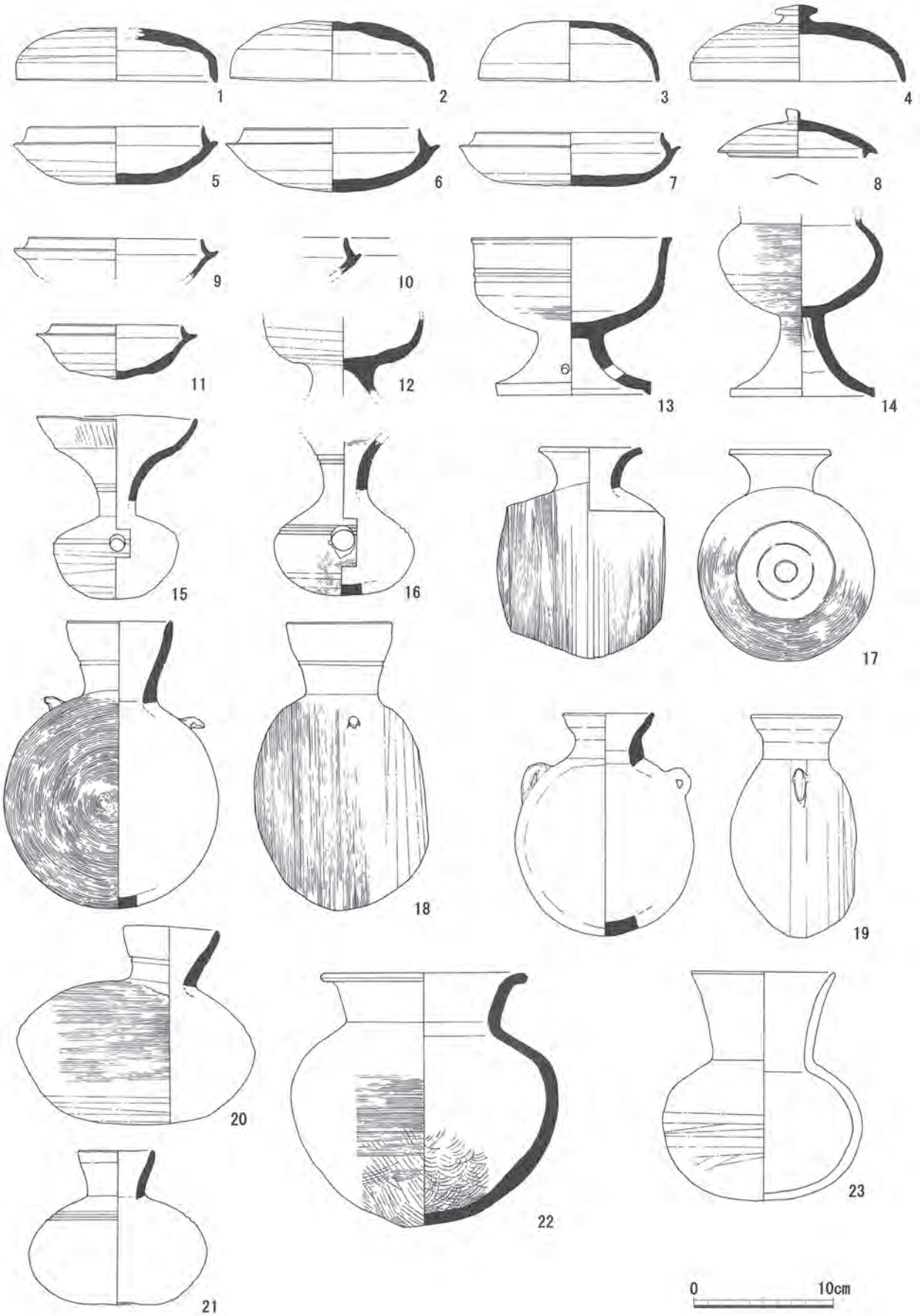


第 70 図　鬼ノ岩屋 2 号墳石室実測図（1/100）

塚原出土遺物（鬼ノ岩屋１号墳西）

遺物は、昭和 33 年に鬼ノ岩屋 1 号墳の約 50 m西側から、耕地整理の際に発見された一連の出土遺物である。鬼ノ岩屋古墳群関連遺物であり、当該古墳を正確に理解するために必要な遺物として今回提示した。

1 は須恵器坏蓋である。法量は復元口径 14.4cm、器高 3.8cm を測る。天井部には回転ヘラケズリ、側面には回転ナデが施される。 2 は須恵器坏蓋である。法量は口径 14.7cm、器高 4.2cm を測る。天井部でやや粗い回転ヘラケズリ、側面には回転ナデが施される。内面天井部には一部ユビオサエの痕跡が確認できる。 3 は須恵器坏蓋である。法量は口径 13cm、器高 4.3cm を測る。焼成が悪く、全体的にしまりがなく脆い。4 は須恵器坏蓋である。法量は口径 15･6cm、器高 5.4cm を測る。天井部には、やや中央部の膨らむ摘みを有する。天井部は回転ヘラケズリ、胴部は回転ナデを施す。天井部内面で一部ユビオサエがみられる。天井部から胴部に至る中ほどで 1 条の沈線を有する。 5 は須恵器坏身である。法量は口径 14.6cm、器高 4cm を測る。外面底部は回転ヘラケズリが施され、底面は平坦に整形されている。カエリは内側にやや傾斜する。内面に一部粘土溜まりが付着している。やや大きめの石英、白色粒子、砂粒などの胎土が目立つ。 6 は須恵器坏身である。法量は口径 15.3cm、器高 4.5cm を測る。底部外面はやや雑な回転ヘラケズリを施し、全体的に丸みをもつ形を呈する。カエリは内側にやや傾斜する。 7 は須恵器坏身である。法量は口径 15.8cm、器高 3.8cm を測る。底部外面は回転ヘラケズリを施し、底部は平坦に整形されている。カエリは内側に傾斜する。8 は須恵器坏蓋である。法量は口径 11.4cm、器高 3.5cm を測る。天井部には乳頭状の摘みを有し、回転ヘラケズリを施す。天井部内面に「へ」の字状のヘラ記号を有す。 9 は須恵器坏身である。法量は残存口径 14.6cm を測る。器壁はやや薄く、内面にやや傾斜するカエリを有する。10 は須恵器坏身である。内面にやや傾斜するカエリを有し、断面にカエリ接合時の粘土接合痕が確認できる。11 は須恵器坏身である。法量は口径 11.9cm、器高 3.8cm を測る。底部外面は雑な回転ヘラケズリを施し、器形はヘラケズリにより作出された陵が目立つ。12 は須恵器高坏と考えられる。坏部器面は軽めの回転ヘラケズリを施し、口縁部に向かい直で立ち上がる。13 は須恵器高坏である。法量は口径 14.4cm、器高 11.2cm、脚端部径 11.1cm を測る。脚部には 3 ヶ所の円形透かしを有し、それぞれの穿孔が均等に配置されずに二等辺三角形状の配置をなす。坏低部付近には一部カキメが施され、胴部中央には 2 条の沈線が巡る。口縁部はやや外方に膨らみ、口唇部は平坦面を形成している。14 は須恵器脚付壺である。法量は、脚端部径 10.3cm、胴部最大径 11.2cm を測る。胴部下方は回転ヘラケズリで整形し、その後脚部上方から壺胴部にかけてカキメを施す。頸部から口縁部にかけては欠損しているが、ほぼ直に立ち上がるものと考えられる。15 は須恵器瓏である。法量は口径 11.5cm、器高 13cm、胴部最大径 9cm を測る。胴部下方に回転ヘラケズリを施し、胴部中央に 1 条の沈線、頸部中央に 2 条の沈線が廻る。口縁部には等間隔に線刻が施されるが、一部で粗い刻みとなる。16 は須恵器瓏である。法量は胴部最大径 10cm を測る。胴部下方には回転ヘラケズリを施し、胴部中央及び頸部に 2 条の沈線が廻る。焼成はやや不良。内部に穿孔を施したときの円盤状の粘土塊と考えられる欠片が内包されている。17 は須恵器横瓶と考えられる。法量は口径 7.5cm、器高 15cm、胴部最大径 12cm(12.6cm) を測る。樽型瓏に類似の器形を呈するが、穿孔は無い。全面にカキメを施



第 71 図　塚原出土遺物実測図（1/4）

す。胴部上方では一部に自然釉が付着する。18 は須恵器提瓶である。法量は口径 7.7cm、器高 20.5cm、胴部最大径 15.4cm を測る。体部の半面をカキメ、残り半面をヘラケズリにより調整されている。頸部には 1 条の沈線が廻る。肩部の摘みは鍵状を呈す。19 は須恵器提瓶である。法量は口径 6.6cm、器高 15.8cm、胴部最大径 12.8cm を測る。体部の半面はナデ、残り半面をヘラケズリにより調整されている。胴部側面には一部接合時についたと思われるカキメが残存している。肩部の摘みは輪状を呈す。20 は須恵器平瓶である。法量は口径 6.9cm、器高 14cm、胴部最大径 17㎝を測る。胴部下方は回転ヘラケズリ、上方はカキメを施す。頸部に 1 条の沈線が廻る。胴部上方には頸部接合時の粘土溜まりが確認できる。胴部最大張部には、接合の痕跡と考えられる窪みが器面に廻る。21 は須恵器直口壺である。法量は口径 5.5cm、器高 11cm、胴部最大径 12.7cm を測る。全面を回転ヨコナデにより整形し、一部には粗いヘラケズリが施される。胴部上方には 2 条の沈線が廻る。底部は若干ではあるが窪む。22 は須恵器壺である。法量は口径 14.8cm、器高 18cm、胴部最大径 19cm を測る。胴部全面にタタキ、後に中から上方にかけカキメを施す。胴部上方から口縁部にかけてはヨコナデを施す。全体的に形が歪で、底部付近では歪みが目立つ。23 は土師器長頸壺である。法量は口径 10.3cm、器高 16.2cm、胴部最大径 14.3cm を測る。全面をナデにより整形し、胴部中ほどに軽いヘラケズリを施す。各個体の色調はほぼ青灰色から灰色をなすが、3 は灰褐色、16 は一部焼成不良による淡灰褐色、23 は白色を呈する。

写真図版 17

71-2

71-4

71-5

71-7

71-8

71-11

71-13

71-14

71-15

71-17

71-18

71-22